

1967年デザイン展望

1967年は高度の経済成長の反面景気過熱が心配され、また、直面する資本自由化への対処、ポンド切下げ、特惠問題など、デザイン界にも少なからざる影響をもつ幾多の話題にとんだ年であった。一方国内市場における一般消費者へのいわゆる3C（カラーTV、クーラー、自家用車）攻勢も特筆に値しよう。今まで高級品とみられた3C製品群も漸く体制が整い、本格的な大衆消費時代の幕をあげ、それぞれ飛躍的普及率を示した。特に自動車の氾濫は年とともに激しく、遂に自動車安全・公害の社会問題を誘発するに至り、国をあげてその解消に努めているが、デザイン界にとっても重要な関心事である。

工業技術の発展は、常にデザインの質的向上の裏付けとなるが、特にICの生産、普及の増大はその利用を簡便ならしめ、コンピュータから補聴器に至るまでその活用を常識化した。ICに続きさらに高性能のLSI、IECなどが開発された暁は、製品デザインに少なからざる影響を与えることが明らかである。このほか、新技術の開発は超薄型TV、TV電話など多くの新デザインの誕生をうながし、明日への期待を深めた。

産業界とデザイン界の協力は年とともに着実に進み、逐次その活動分野をひろげ、すでに産業、医用機器など未踏の専門機器群にも意欲的なデザインが散見されるが、これは両者の努力がより広く確実に定着しはじめた証左であろう。しかし全産業的視野からはデザインの効果的活用も、デザイナーの活動の場もまだ十分とはいえない。

今後デザインが、工業技術の発展を人間の側に順化し、多様性のある動的環境の中において人間の福祉と生活向上に確かなものとして役立つためには、改めて広範な知識、思考と、技術的訓練による行動との統一を図り、デザイン体系の再認識、総合的視野にたつ開発の方途を再検討する必要があるが、漸くこのような新段階に入りつつあると見られるいくつかの動きが察知された。たとえば、来るべき情報産業時代を背負う電子計算機をデザイン技術の前進に積極的に活用しようとするデザイナーたちの意欲と行動。JIDA、DNIUS その他の団体を中心とする次代の社会、生活環境に対応して高次の視点からデザインの使命を究明しようとする思考的基盤形成への努力。教育界にも、次の生産、伝達の場に適応すべき新しい型の総合開発計画者の育成を旨としてこの年武蔵野美大に設けられた基礎デザイン学科の誕生、また68年度設立を目的に、科学と芸術との総合により、技術の進路を計画し、その機能を設計する新しい視野と能力をもつデザイン開発者を養成しようとする九州芸術工科大学の準備活動などがあげられよう。これらは次のデザイン時代を開く、地味な、しかし烈しく燃える“のろし”として期待したい。

また、カナダにおける第5回ICSID会議、EXPO'67の成果も忘れることができない。特に両者の緊密な計画と運営の見事さ、また万国博の美しい自然と高次の人工環境とを融和させた雄大にして緻密なシステム・デザインは“人間とその世界”をたくみに演出したものとして好評を得たが、来る'70を担当するわれわれも、デザインの総力を結集し、勝るとも劣らぬ独自の意義ある計画を被歴して世界の進歩に貢献したいものである。